

＼小劇場演劇の魅力に迫る！／

キタゲキ コラム Vol.2

団体・組織名に自らの名を冠する、というのはいかなる想いの現れか。有門正太郎プレゼンツ、通称・アライブ始動の際にはそのネーミングセンスに疑問がなくなかったが、公演を観るごとに納得は増していくこととなる。

公演には九州を中心に名のある実力派劇作家（劇団代表、主宰など先輩筋も多数）を執筆陣に迎え、依頼するのはほぼコト。しかも、飛び切りナンセンスな短編ネタが居並ぶ事態に。それが、代表の有門による強い希望によるのかは確かめたことがない。が、ナンセンスの追求が武道家レベルのこだわりで、有門の趣味嗜好だけでなく、錚々たる作家たちの中にもナンセンス希求の欲望があるのでは、と思わざるを得ない。くだらない、脱力するほどくだらないうえに面白い。また、それを体現するのが北九州を中心とした腕利き俳優陣だから堪らない。

オープニングにはメンバー紹介も含む前説トークがあり、その場面の有門は懐かしいプラスチックのメガホンを使って、俳優たちにどしどしツッコむ。ドリフターズ、伊東四朗と小松政夫といった昭和の名コメディアンたちに倣う、超正統派のツッコミだ。俳優たちはそれをパワハラと糾弾し、反撃に出たりもする。切れ良く力強い発語、自身含め出演する俳優たちのデフォルメされた仕草や表情での表現は、いつかのインタビューで有門が話していた、若い頃に憧れた落語から得たものか。

あらゆる事象を徹底的に「笑い」に転化する。とって有門の創作が、「笑い」のためだけのものと言い切るのは早計に思える。濃い目のオモシロに対する感度の高さは天賦の才だろうが、有門の表現者としての強固な土台は「富良野塾」での研鑽によるところが大きいはずだ。脚本家として伝説的な作品を多々手掛けた倉本聰が、北海道富良野を拠点に若き才能と寝食を共にし、純度高く創作すべく作ったのが富良野塾。そこでの時間と蓄積、続く劇団飛ぶ劇場での活動が有門の、演劇創作の確固たる基盤になっているのは間違いない。

九州の演劇を追い始めた当初から、目を引く劇団ごとにイイ俳優が所属していることに目を見張った。前回紹介の「飛ぶ劇場」には当時「四天王」と呼ばれる俳優があり、その一人が有門正太郎だ。彼が旗揚げ、その後独立した「アライブ」、がまたとんでもなくて……。

(文:演劇ライター 尾上そら)

もしや社会派!? 「有門正太郎プレゼンツ」はモノ申す



Vol.1はこちら



さらに近年の有門は、町歩きや聞き取りなどをベースにした市民参加型の創作や、精神疾患のため幻聴や幻覚がある方々と共にワークショップを行って症状を台詞にする取り組みなど、演劇の手法を使いつつ作品創作に留まらない意義深い活動にも意欲的に取り組んでいる。舞台芸術との距離や経験値がさまざまな、それらの人々との出会いや交流、参加者を介して発見した社会の矛盾や歪みなども自身の創作の糧になっており、そのため作品がある種の風刺性を帯びるのでは……というのは、うがち過ぎる見方だろうか。

さてアライブ、このたびの新作タイトルは『お互い様、他力本願寺』と、この時点でほどよくふざけている。有門自身による書下ろしで、執筆中の戯曲冒頭を読ませていただいたところ、お約束の前説トークは健在。出前を取り、業者を雇い、金を払ってでも日常生活から寺の運営(?)まで「他力」を当てにすることを旨とし、その様子がメディアでバズった他力本願寺の人々を軸に、ストーカーやノルマなど、さまざまな世間の縛りやしらみから「逃げる人々」を描くコメディになるとのこと。なんか、身に覚えがあり過ぎて刺さる内容になりそう、ちょっとやだな。

ほら、こう書くと社会問題に意識の高い内容っぽくありません？ え、そんなことない?? そうですかねえ。まあコレばかりは、作品を観ないことにはなんとも言えません、まだ有門氏の頭の中にしかないことのほうが多いので。

ということで反論・異論は公演後にお聞かせくださいと幸いです。そのためにはまず、アライブを観ないといけないわけで、劇場で一緒できることを願っております、ハイ。

有門正太郎 プレゼンツ vol.8 「お互い様、他力本願寺」

J:COM北九州芸術劇場
小劇場

12月1日(金) 19:00
12月2日(土) 13:00/18:00
12月3日(日) 13:00

●料金
一般 3,000円
ティーンズチケット 1,500円
(13~19歳、要身分証提示、枚数限定)

*一般当日500円増 *未就学児入場不可

J:COM北九州芸術劇場
KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER KITAGEKI120

▶ 次回紹介演目 ◀ 劇団 こぶく劇場 「ロマンス」